

実践が「宏話」にいのちを吹き込む

上 廣 哲 治

会長に就任してからこれまで、「倫風宏話」を無事執筆しつづけることができました。おかげさまで好評のようで、感想のお手紙や励ましの言葉をたくさん頂戴しております。その宏話を、今月号からはひと月おきの偶数月号に掲載することにいたしました。

突然のことで驚かれる方も多いと思いますが、隔月掲載を決めたのには理由があります。

初代会長から二代、そして三代の私にいたるまで、「宏話」に相当する記事は、名称は変化したものの途切れることなく続いてきました。「宏話はわが会の魂」「会誌のいのち」などとおっしゃる先輩会友さんもいらっしやいます。もちろん宏話にいのちを吹き込んでくださるのは皆さんの実践です。宏話に学び、その学びを実践して「より善く生きる力」に変えることで、宏話はいのちを与えられているのです。

ところが近年、インターネットなどによりさまざまな情報があふれるようになると、それを見るだけで時間をとられ、宏話を熟読することができないという声を聞きます。定額配信の映画やドラマを倍速で観たり、粗筋あらましだけで小説を読んだつもりになる人がいるように、いかに大切な記事でも、じっくり読

んで実践に移すことが難しくなっているようです。数年前に聞いた若い会友さんの、「毎月、宏話を読んでいますが、内容を理解するのに追われ、実践が追いつきません」との言葉が耳から離れません。

先にも書いたように、宏話にいのちを吹き込むのは実践です。内容を理解したら終わり、ではなく、実はそこが出発点なのです。「教育とは魚を獲とって与えるのではなく、魚の獲り方を伝えることだ」といわれます。宏話も同じように、一つの結論を示して、それを理解していただくだけが目的ではありません。結論にいたるまでの筋道を反復して考え、まずは実践に移していただきたいと思います。宏話の学びが実践によって身体化されたとき、はじめて宏話は理解されたといえるのではないのでしょうか。

宏話ファンの方はお気づきだと思いますが、初代や二代会長が書いたものと、三代の私の宏話とでは、取り組み姿勢がやや異なっております。初代・二代の時代には、宏話の内容を自然に受け入れることができる共通の社会的基盤がありました。たとえば、核家族を中心とした「中間層」の存在です。当時の読者は、「家族」といえば夫婦と未婚の子からなる核家族や、祖父母をふくむ大家族を瞬時に思い描くことができました。家族という言葉が示す内容についての共通理解があったのです。ですから、先代の二人はそれらを前提に、普遍的な論を縦横じゅうおうに展開することができました。

ところが、最近では家族形態も生活スタイルも多様化しています。単独世帯や夫婦だけの世帯が増え、核家族の典型とされてきた夫婦と子どもの同居世帯は相対的に減少してきました。さらに、ひとり親の世帯もあれば大家族もあるという具合に、さまざまな家族形態が横並びに混在しています。そのため、家族という一語にさまざまな形態を織り込み、一般化して論じるのは困難になってきたのです。

そこで私は、皆さんと「共に考える」という姿勢に重きを置いて、宏話に臨むことにしました。「わ

が会の教えに照らして私はこう考える。皆さんはどう考えますか」というスタンスです。なかには批判的に受け取る方もおられるでしょう。それはそれでいいのです。大切なのは、宏話を手掛かりにして自ら考え、学びを深め、実践していくことなのですから。

「考える力」は、予測不能な現代を生きるうえで必要不可欠です。新型コロナウイルス感染症のパンデミックが続いたと思えば、ロシアがウクライナに侵攻し、核兵器の使用も現実味を帯びてきました。一方で地球の温暖化により、自然環境は刻々と悪化しています。AI（人工知能）などの進歩で社会も大きく変化しております。この先、何が起きるのかは想像することもできません。このような時代には、「これを守れば安心」という絶対的な行動規範はありません。それぞれが置かれた状況のなかで、いかに行動すべきかを考えて生きるしかない。「共に考える」という姿勢には、そのような思いがこもっているのです。考えて行動するというと、私は子どものころに読んだマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』を思い浮かべます。主人公のハックは、何かことが起きると必ず立ち止まって、いかに行動すべきかを考えます。飲んだくれの父親から逃れて冒険に出たハックには、たいした知識もないし相談する大人もいません。結局、自分の頭で考えるほかないのです。

今でも覚えているのは、ハックが悩んだすえ、仲のいい黒人奴隷のジムを助ける決断をする場面です。舞台となった一八三〇〜四〇年代のアメリカ南部には奴隷制度が存在し、奴隷を所有することは当然の権利であると考えられていました。南部に暮らすハックも、その常識を共有していたでしょう。

ハックと逃亡奴隷のジムは、自由を求めてミシシッピ川を下る旅に出ます。ところが農場でジムは捕まってしまいます。ジムには高額な賞金がかけられていたのです。ハックはジムを助ける方法を懸

念に考えます。一つは、ジムのことを元の所有者に手紙で知らせ、取り戻してもらおう方法です。しかし、それは自由を求めて逃げたジムを裏切ることになります。もう一つは、逃亡奴隷の幫助ほうじょという罪を犯してジムを助け出すことです。手紙を書くか、重罪を犯してでも助け出すかのどちらかです。

「ふたつにひとつ、どっちかにキツパリきめなくちゃいけない。おれはイキを半ぶんとめて、しばしかながえた。それから、ムネのうちで言った——『よしわかった、ならおれは地ごくに行こう』」（柴田元幸訳『ハックルベリー・フィンの冒険』）

ハックは当時の常識に背き、地獄に墮おちる覚悟で逃亡奴隷のジムを助け出すことにします。「人権」という高邁こうまいな理念で判断したわけではありません。ジムの自由を守ることが大切だと、ひとり孤独に考えて決めたのです。ここに倫理の出発点があると私は感じました。自由を求めるジムの気持ちは、侵すことのできない人間の真実です。ハックは、いのちに代えてでもジムの自由を守りたいと考え、しかもそれを行動に移す決意をしました。考えることと実践することが結びついているのです。

もちろん、ハックのような危険を冒すおか必要はありませんが、皆さんにも宏話を通して考えたことを実践に移していただきたい——。そうした時間を確保していただくため、あえて宏話を隔月の偶数月号に掲載することにしたのです。奇数月号は会の活動に関する記事を省いた、いわゆる広報誌として刊行することになります。「宏話がないと会誌の意味が薄れる」とおっしゃる方がいるかもしれませんが。その方々にはナゾナゾをお出ししておきましょう。「ないから役に立つものは何？」。

答えは「空き箱」です。おわかりですね。奇数月号には宏話がない。だからこそ、そこで皆さんの思考や実践を自由に発展させることができるのです。「ない」ことで宏話は、より能弁になるはずですよ。